

(様式第1号)

研究No. (記載不要)	20-学長-1
-----------------	---------

平成20年度配分 研究成果の概要

研究名	「2020年のSUAC」調査研究				
配分を受けた 特別研究費	特別研究費 3,600千円				
研究者氏名 (代表者)	学部名 (研究科名)	学科名	職	氏名	共同研究の 場合の分担
	デザイン研究科		研究科長	川口 宗敏	
共同 研究 者	文化政策学部	文化政策学科	教授	森 俊太	
	文化政策学部	文化政策学科	教授	根本 敏行	
	文化政策学部	芸術文化学科	講師	立入 正之	
	デザイン学部	空間造形学科	教授	寒竹 伸一	
	デザイン学部	空間造形学科	講師	花澤 信太郎	
	企画室		主幹	山本 茂之	
	SUAC 卒業生			富田 晋司	
	SUAC 卒業生			坂田 昌代	
発表の方法 (予定で可)	1 紀要		号数	第 号 (年 月発行)	
	2 学会等での発表 学会等名:		発表日 (発表 予定日)	平成 年 月 日	
	3 その他 発表の方法:毎月1回開催の研究会		発表日 (発表 予定日)	平成20年4月から、 毎月1回の研究会開催 (計7回開催)	

注:配分を受けた翌年度の6月末までに提出

(研究の目的等)

本研究は地域社会における本学の役割と将来ビジョンについての研究を行う。
2020年までの今後10年間の視野に、「まちづくり」を中心テーマとし、本学の都心型立地を活かした構想をとりまとめ、内外に公表する。

本研究によって次のような成果が期待される。

- ①地域社会の活性化、まちづくりにおける本学の役割、さらには行政・市民・大学の協働・連携の在り方について提案を行い、政令市浜松の発展に貢献する。
- ②わが国の地方都市において、地域社会と大学との新たな関係についてのモデルを提案し、大学の社会的役割に関する新領域を開拓する。

(研究の実施方法等)

○研究会を毎月1回開催し、研究メンバーおよびゲストによる関連のプレゼンテーションとディスカッションを行った。研究会の内容および関連資料についての整理を行い、メンバー間の情報共有を図るとともに、関連情報の収集を目的とした視察、ヒアリング等を行った。

○本研究は浜松市の整備事業計画、市街地再開発事業、公園緑地整備計画等と密接に関連することから、毎回の研究会に浜松市役所の担当者を招き、計画や事業についてのヒアリングやディスカッションを実施した。

(得られた成果等)

平成20年度の本研究プロジェクトにより得られた成果は別紙の通りである。

1. 研究の目的と期待される成果

本研究の中心テーマは「まちづくりにおける大学の役割」であり、都市における大学の機能、都市の魅力向上に貢献する大学の役割について考察するものである。具体的には浜松市と本学の相乗的な魅力の向上を目指して、2020 年（平成 32 年）までの実現を視野に入れながら、地域社会の一員としての本学の新たな将来ビジョンの作成と提案を行う。

本学は政令指定都市浜松市の都心に立地し、学部構成、研究領域の面において地域社会の活性化や今後のまちづくりに寄与できる十分なポテンシャルを有しているものと考えられる。ハード、ソフト両面における本学のリソースを地域社会の活性化、まちづくりにも活用し、行政・市民・大学の協働・連携の在り方についての提案を行うことによって、地域社会、さらには浜松市の発展に寄与することが可能である。またその試みはわが国の地方都市における地域社会と大学との新たな関係についてのモデルを提示し、大学の社会的役割に関する新たな領域を拓くものであると考えられる。

2. 平成 20 年度研究会における報告、情報提供等

本研究は平成 20 年度に計 7 回の研究会を開催した。各研究会では 1～2 の具体的なテーマについて、基調となる報告、情報提供が行われ、その後で出席者が自由に意見を述べ合うという形式で進められた。各研究会における報告、情報提供の内容は下記の通りである。

(1) 第 1 回研究会（4 月 24 日）

①テーマ：立命館アジア太平洋大学視察報告

②報告者：川口宗敏（デザイン研究科長）、山本茂之（企画室）

③報告内容

大分県別府市に立地する立命館アジア太平洋大学（APU）の視察報告が行われた。APU はアジアを中心とした海外からの留学生が多く学び、学生はキャンパス内の学生寮（AP ハウス）で生活している。学ぶ場と居住空間がキャンパス内にあることで、日本人学生と留学生との交流も深まり、大学が海外に向けて開かれる環境が整備された。大学が開かれることによって別府市もまたアジアに開かれることとなり、アジアからの来訪者、観光客も増加するという好循環が生まれている。

(2) 第 2 回研究会（5 月 27 日）

①テーマ：「SUAC 美術館」について

②報告者：立入正之（芸術文化学科）

③報告内容

本学の既存施設の活用による「大学施設全体を使った美術館」＝「SUAC 美術館」の構想が提案された。本学西ギャラリーやラウンジ、講堂ホワイエ、自由創造工房などの活用法の見直しにより、キャンパス全体を一層魅力ある空間に作り変えることが可能で

あり、作品発表の場の拡充と整備は本学教員や学生の励みにもなるものである。また本学では学芸員の養成課程を有しており、資格を取得した卒業生が学芸員として「大学ミュージアム」の運営に従事し、経験を積むというルートが作られれば、学ぶ場としての本学の魅力向上にも繋がるものと考えられる。

(3) 第3回研究会 (6月26日)

①テーマ：アイルランド・コーク市 (2005年・欧州文化首都) の事例紹介

②報告者：根本敏行 (文化政策学科)

③報告内容

アイルランド第2の都市で2005年の欧州文化首都となったコーク市にある旧給水所の再整備に関する事例報告が行われた。旧給水所は元々蒸気機関駆動の古い施設であったが、欧州文化首都事業による補助金を受けて再整備され、現在は環境教育施設「ライフタイム・ラボ」として活用されている。再整備事業では建物の保存と内部のリソースセンターへの機能転換が行われ、現在、同施設では蒸気機関やボイラーなどの展示の他、移動教室スペースにおいて学芸員による環境に関連する授業も行われている。この再整備事業は産学官連携プロジェクトで実施されたもので、学術研究機関としてコーク大学が参加した。アイルランドにおけるライフタイム・ラボの事例は本学に隣接する中ポンプ場施設の機能付加の点からも参考になる事例と考えられる。

(4) 第4回研究会 (8月2日)

<テーマ1>

①テーマ：「浜松の今と未来」

②報告者：秋山雅弘氏 / ㈱アルモニコス代表取締役 (ゲスト)

③報告内容

現在の世界の課題から段階的に対象範囲を狭め、日本の課題、浜松市の課題さらには浜松の街中の課題までが順次整理された。「産業 (ものづくり) のまちづくりへの貢献」という視点から、航空技術と宇宙産業の可能性、静岡空港の活用、新航空輸送システム (V/STOL) の可能性などが論じられた。特に街の活性化については、「引力を大きく (街の魅力、楽しめる、面的アクセスの改善)」、「重力を小さく」 (来やすさ、線的アクセスの改善、安価な駐車場) することが重要であると述べている。

<テーマ2>

①テーマ：「浜松市文化振興ビジョン 中間骨子について」

②報告者：片山泰輔 (芸術文化学科)

③報告内容

「ビジョン」では「創造都市・浜松の実現」に向けて、都心に「クリエイティブ・コア」を構築することが提案されている。具体的にはアクトシティから本学に至る地区一帯をクリエイターがステップアップのためのステージとして活用するというものである。またサステイナブルな文化づくりのため、社会起業家が活躍し、社会問題を解決するア

ーツの担い手を市民の中から育て上げることを目指す、としている。

(5) 第5回研究会 (11月26日)

①テーマ：「バウハウスの成果と現在への継承」

②報告者：花澤信太郎 (空間造形学科)

③報告内容

第二次世界大戦前のドイツに存在したデザイン教育機関「バウハウス」の概要について、ヴァイマル、デッサウ、ベルリンと各時代に沿った活動内容の説明が行われた。バウハウスがもたらした成果として、時代の変化に対応した新しいデザインと生活スタイルの提示、新たなデザインを産み出す方法論と教育法 (デザイン運動とデザイン教育)、手仕事から産業への指向等が指摘された。さらに「バウハウス」の現代への継承の状況 (ヴァイマルのバウハウス大学、デッサウのバウハウス財団、ベルリンのバウハウス博物館 etc.) についても言及された。

(6) 第6回研究会 (12月16日)

①テーマ：「芸術文化夢舞台プロジェクト」構想案

②報告者：川口宗敏 (デザイン研究科長)、寒竹伸一 (空間造形学科)

大学院デザイン研究科学生

③報告内容

これまでの研究会において報告された事例や議論された視点をベースとして、本学キャンパス及び本学に隣接する野口公園、中ポンプ場、公民館 (東自連会館)、東小学校に係る地域の改造計画の構想案が模型によって示された。(詳細は後述5)

(7) 第7回研究会 (1月29日)

平成20年度研究会のまとめとして、過去6回の報告と議論を総括し、今後の方向性について自由討議の形式により意見交換を行った。プラン全体の「キーコンセプト」に対する共通理解の不足や学内施設利用における自由度の向上などの意見が出され、今後はさらに可能な部分から具体的なプランを作り上げることが必要であるという意見が多く提出された。

3. 平成20年度研究会において抽出されたポイント

平成20年度研究会における報告、情報交換、模型提示、討議の中から抽出されたポイントは以下の通りである。

(1) まちづくり及び東地区 (浜松市中区中央地区) の課題

①浜松市の都心地域において東地区が果たすべき役割について

空洞化が問題となっている浜松市の都心地域において、近年新たな拠点として再開発された東地区は、大きく「シビックコア地区」と「教育文化ゾーン」とに区分され、行政関連施設、公園、民間事務所、住宅および教育・研究施設などが立地している。現在までにハードの整備はほぼ終了しており、今後は浜松のまちづくりの視点から現

在の東地区がどのような役割を果たしているのか、また果たしていくべきなのかが問われることとなる。

②東地区・大学周辺地区の賑わい不足について

再開発により新たな姿となった東地区は、歩道幅が広く、モダンな街灯も設置された美しい街路が整備されている。しかしながら現在の大学周辺地区は賑わいに乏しく、特に夜間の人通りは極端に少ない。人通りの少ない、賑わいの失われた東地区をどのように活性化するのか、そのためにどのような仕掛けが必要となるのか、賑わいを創出するために当該地区に立地する本学がどのような役割を果たすことができるのか等は浜松市や当該地区のみならず、本学の魅力をさらに向上させる上でも極めて重要な課題である。

③市民、学生が集う機能（カフェ、レストランなど）について

東地区の賑わい不足の一因として、市民や学生が集う場所の不足を指摘することができる。伝統ある大学の周辺には「学生街」が形成され、古書店や自由で知的な雰囲気のカフェなどが軒を連ねるが、開学して10年近くが経過する本学の周辺には学生街が形成される兆しもなく、知的な雰囲気を求める学生や市民を集積する施設はほとんど見られない。高度な教育研究の場には自由で知的な雰囲気を持つ「学生街的機能」の集積が不可欠であり、学内、キャンパス周辺、さらには東地区に当該機能の集積を図るべく、様々な支援活動や仕組みづくりが求められていると考えられる。

④本学キャンパス、アクト通り、学園通り、野口公園、公民館（東自連会館）等の活用について

以上①～③の問題意識を踏まえ、本研究プロジェクトでは本学キャンパスの他、東地区のメインロードであるアクト通り、本学正門より南側に伸びる学園通り、本学南側に隣接する野口公園、同じく本学南側野口公園横に立地する公民館（東自連会館）などを「夢舞台」の場として検討を進めるものとする。

(2) 植栽・緑化・環境保全に関わる課題

①東地区・大学周辺地区の植栽、街路樹について

東地区・大学周辺地区は都市計画によって街路樹が整備されているが、一部の区域では市民が自主的に花を植える活動が行われており、地域の美観向上に貢献している。これら地域の一般市民と本学学生、職員が連携し、草取りや落ち葉清掃等を含めた植栽、街路樹整備の活動を活発化させることによって、東地区・大学周辺地区を一層魅力的な地域に変えていくことが可能ではないかと考えられる。

②中ポンプ場施設の見直しについて

本学南側に隣接する中ポンプ場の施設は、浜松市の下水道整備事業の一環として昭和40年代前半に設置されたものであり、近年中ポンプ場についてはリニューアル工事が行われ、完成をみている。ポンプ場施設には隣接して地域住民のための公民館が併設されているが、公民館の建物自体は当初建設されたままであり、公共的な施設と

しては利用頻度も低く、市民が集う場所としての機能は十分に果たされていない。したがって老朽化した公民館部分については、浜松市とも協議しながら再利用の可能性を検討する。具体的には下水道ポンプ場の機能を保持しながら、アイルランド・ヨーク市の事例に倣って環境教育のための展示スペースなどを設ける構想、あるいは大規模な建替えによってより集客力のある賑わい創出の施設への改変なども考えられる。

(3) 「学生街」形成の課題－“学住一体”地域の創出

周囲に大学町が形成されるようなヨーロッパの伝統ある大学では、街と大学が一体となった風格のある知的な雰囲気の中で、学生が生活と勉学を同一地域の中で行っている事例が多い。また学生寮と「マイスターハウス」を同一敷地内に兼ね備えたバウハウスのような事例、あるいはわが国においても修行と生活の場が一体となった仏教寺院などの事例がある。

わが国でも歴史ある大学の周辺にはいわゆる「学生街」が形成されているが、現代ではアジアをはじめとする世界各国からの留学生も多く、大学は多文化が混在、共生する場所となっている。学ぶ場と生活の場が近接していることは、前述のAPUの事例をみても様々なメリットがあると考えられる。現在の本学周辺には学生街や学住一体となった地域の形成はなく、「学び、生活する環境」の一層の向上が求められている。ヨーロッパの大学都市やわが国の伝統ある大学、またはAPUなどの事例を参考に、学生が集い、生活する街と学ぶ環境との一体化を図っていく必要があるものと思われる。本学の将来的な可能性として、上記(1)－③に加え、APUやバウハウスの事例に倣い、大学周辺に学生会館、学生寮等を設けることも考えられる。

(4) キャンパス施設の見直しと改造に関する課題

本学はまもなく開学10周年を迎え、これまで教育研究機関としての実績および地域社会における存在感ともに着実に向上しているが、「次の10年(Next Decade)」に向けては、充実した教育研究の場として、また市民に開かれた知的刺激に満ちた空間としての魅力をさらに高める工夫が必要である。

① 既存施設の新たな形の活用

前述「SUAC美術館」構想にもある通り、本学既存施設の利用法見直しによって、大学全体の魅力向上を図ることが可能である。そのためには施設利用の頻度向上、規制緩和、使用目的の拡大などが必要であり、考慮すべき場所として西ギャラリー、文化・芸術研究センターホール、講堂(ホワイエを含む)、自由創造工房、学内回廊、学生食堂などが考えられる。

② デザイン運動とデザイン教育の場として

ものづくりの街である浜松に設置された本学デザイン学部が新たなデザイン運動とデザイン教育の場として一層発展していくための一助として、バウハウスの事例に倣い、本学のキャンパス施設が全体として教育、研究、創作、発表の一貫した空間となるような見直しが必要であると考えられる。

4. 「芸術文化夢舞台プロジェクト」平成20年度研究会において打ち出された方向性

(1) 魅力ある学生生活

大学がまちづくりに貢献するためには、まず大学自体が魅力ある場でなければならない。「大学の魅力」は多様な定義が可能であろうが、大学の主役は学生であり、本学に学ぶ学生それぞれが魅力的な学生生活を送ることが重要である。この点は本プロジェクトの基幹をなすものであり、大学が都市の中で果たすべき役割も「魅力的な学生生活」から発する部分が大きいものと考えられる。

一般に大学は「教育、研究の場」と位置付けられるが、充実した教育研究とは単に教室や演習室、研究室、図書館等における狭義の教育研究に限るものではなく、「学ぶ・住む・生活する・遊ぶ・交流する」という学生生活全般にわたる各行為が有機的な繋がりをもちながら作り上げられていくものである。大学施設、大学周辺地区、大学立地都市が学生たちの夢を実現するに相応しい場所となっているか、学生が「学び、生活し、遊び、交流する」に十分な環境を作るためにはどのような形が望ましいのか、という視点こそが本研究プロジェクトの中から生まれる様々な構想の原点である。

(2) まちづくりと賑わい創出

本学は政令指定都市浜松の都心に立地しており、「学び、生活し、遊び、交流する」場としての学生街が大学周辺地区に形成されることは、浜松市の都心の魅力向上、都市の活性化にも寄与するものである。伝統ある大学や新たな構想の下に創られた新設大学等、他の事例を参考にしながらも、浜松市の都心に相応しい特色のある学生街を目指すことが重要である。その「特色」が浜松市の新たな魅力へと繋がることで、まちづくりへの貢献を果たすことができるものと考えられる。

(3) 新たな時代における大学機能の再検討

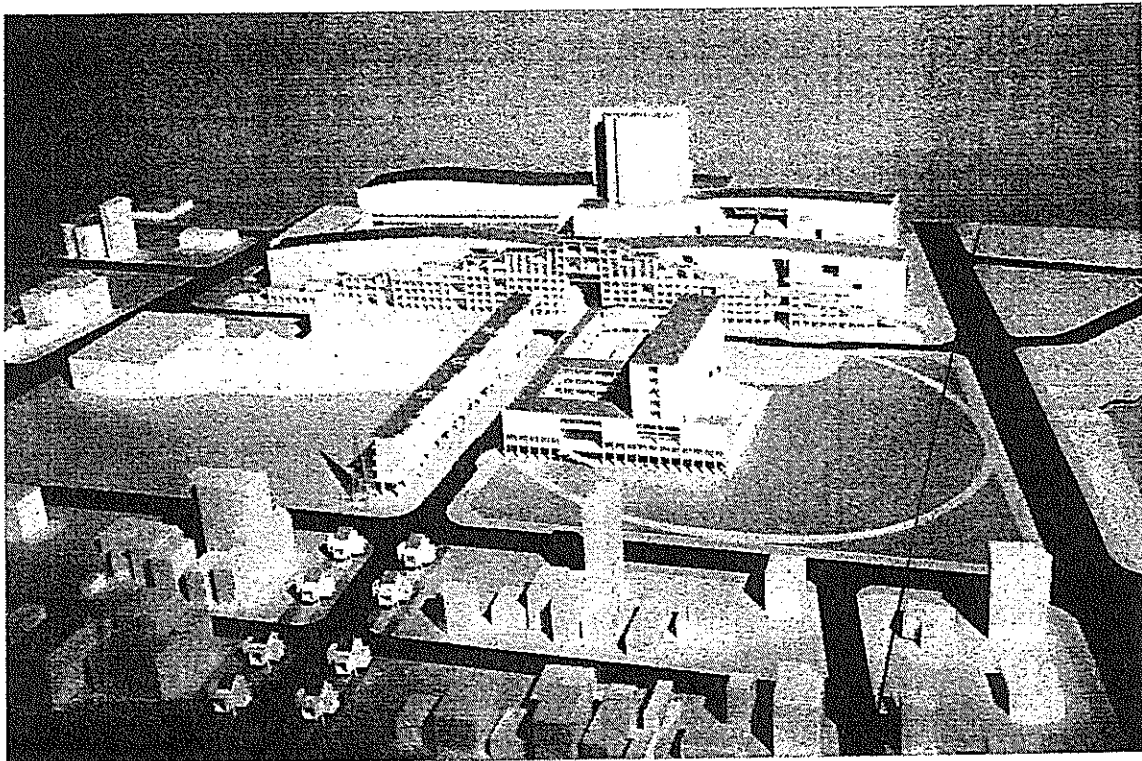
大学の主役は学生であり、大学に期待される最も重要な役割が教育、研究であることはいままでもないが、今日の大学はそれ以外にも様々な公共的役割を期待される存在である。一般には産学官連携や「市民に開かれた存在」としての役割への期待が大きく、わが国でも多くの大学で積極的な取り組みが行われている。このような動きを改めて考えてみると今日の大学に求められるものとは「都市の時代」における市民の表現・コミュニケーション・交流の場としての役割であり、創造的な活動を志向する人々の創造力涵養、知的刺激の場としての役割であろう。大学のまちづくりへの貢献を考察する本プロジェクトにおいても、大学に期待されるこれらの役割に十分な配慮が求められる。

学生、地域・都市、市民への貢献を果たし、期待に応えていくことが今日の大学には求められており、同時にそれは大学自体の一層の質的向上と魅力アップへと繋がり、大学が立地する周辺エリア・都市の魅力と相俟って、大学、地域・都市、市民の関係に好循環を作り出すことができるのである。

5. 芸術文化夢舞台プロジェクト構想案

研究会で協議された議論、打ち出された方向性を踏まえ、本学キャンパス及び近隣公有地を対象とした将来構想の提案が次の通り行われた。

模型写真1：模型の全体像（東地区南側より大学を望む）

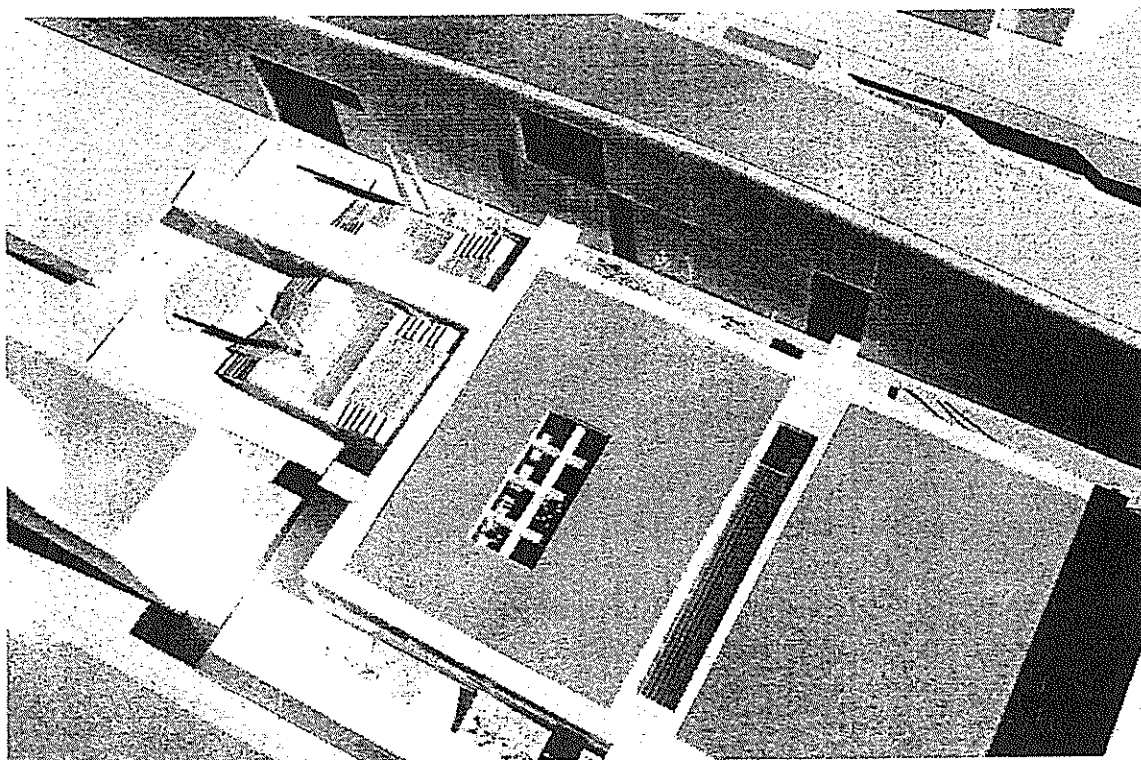


(1) キャンパス改造

①現駐車場（一般用）を開かれた空間に改造し、学園通りから入る本学の正面玄関前と合わせて「広場」として整備、演劇等のパフォーマンス・アーツを行う場としても使用する。

③西エントランス南側の循環バス（くるる）乗り場を公道脇に移動し、カフェのような空間とする。現・西ギャラリーはそのまま使用するが、車の進入路がなくなるため、回遊式のギャラリーとすることが可能である。

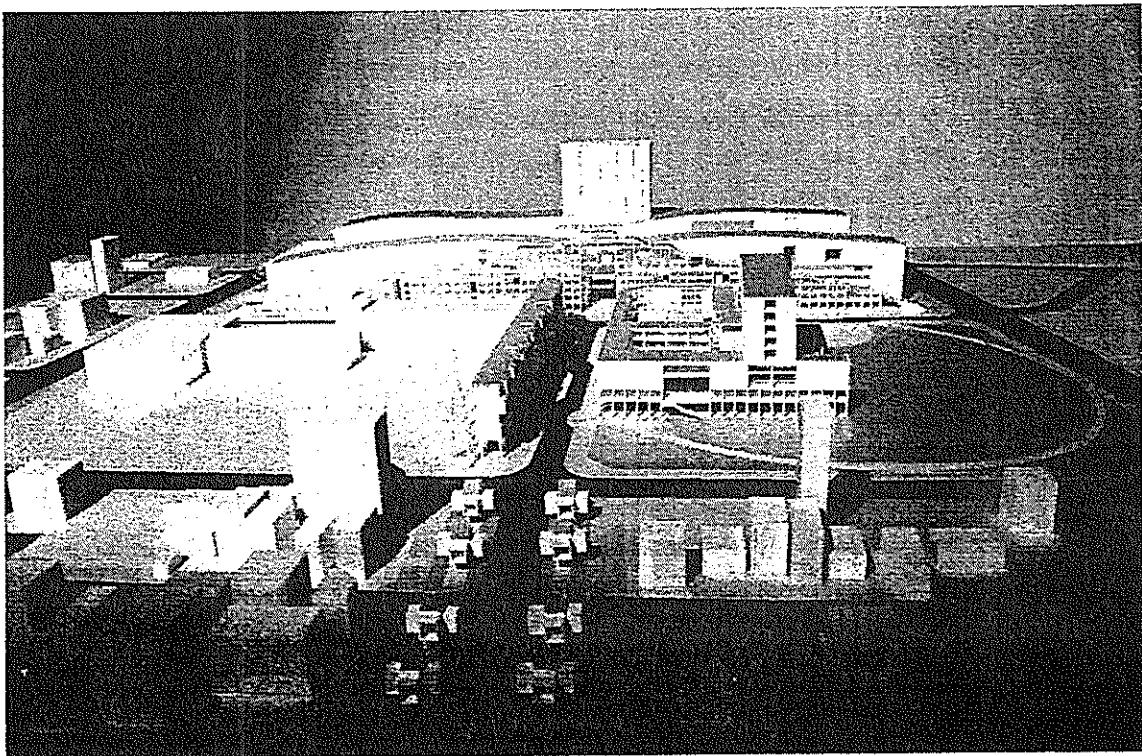
模型写真2：正面玄関付近（上から）



(2) 居住スペースの建設

- ①本学現南棟の南側、水路部分に階段形状の居住用建物（居住スペース 200～250 ユニット）を建設する。南棟は南側にも廊下が敷設されているので2階と4階を居住用建物との共通部分とする。
 - ②中ポンプ場及び公民館部分のうち2階の現・公民館を共通部分とする。使用できるスペースは全て使い、高層棟も建設する。居住スペースは高層棟で 130 ユニット、その他部分で 150 ユニットとなる。
 - ③東小学校校庭東側に建物を建設する。建物1階部分に現在東小校庭西側にある遊具を移動（懸垂式にて設置）し、小学生が雨天でも使用可能な場所とする。住居部分は 100～120 ユニットで、本学南棟とはブリッジでつなぎ、大学との一体感を持たせる
 - ④学園通りは車道幅 10m に対し、歩道幅が 30m ある。歩道の両サイドを 8m ずつ使用し、ピロティ型住居（3 ユニット、ソーラー&風力発電設置、キッチン等共同、エコ実験用の住居）42棟を建てる。住居は 3 ユニット×42棟で 126 ユニットとなる。
- ①～④の合計で住宅は約 800 ユニットとなり、中庭方式の居住スペースには学長他教員の居住スペースも作る。

模型写真3：居住スペース（学園通りから大学方面を望む）



6. 2010年までの課題

(1) ハードウェア（建物、公園、ストリート、花と緑、環境保全）の整備について

①既存施設の機能見直し、改造

これまで検討を重ねてきた既存施設の機能見直しや一部の改造については、今後の研究会の中で再度議論を整理し、本学キャンパス及びその周辺地区が芸術文化の「夢舞台」として相応しい場となるよう、具体的かつ実現性の高いプランを作り上げ、関係部署とも協議しながら、実現に向けた調整を図る。

②新規施設の建設

新規施設建設のプランは2008年度の研究会では十分な検討を行う時間的余裕がなかったため、新規施設にどのような機能を持たせるのか、そのための最適な方法はどのようなものなのか等について、提案されたプランをベースに検討を継続する。

(2) ソフトウェア（運用する仕組みと仕掛けの研究）

ハードウェアについての議論を進めるに当たっては、それらのハードを具体的にどのように機能させ、大学、周辺地区、浜松市の中の魅力的な存在として位置付けていくのかについて、施設、設備等を運用する仕組みと仕掛けなどの「ソフトウェア」についての研究を欠くことはできない。具体的には下記①～③についてのプランの具体化が求められる。

①本学に加え他大学、専門学校とも連携して、多様な個性と志向を持つ学生が「芸術文化夢舞台」に関わり、互いに積極的なコミュニケーションを行う中で成長することができるよう、また都心に若者があふれる魅力的な都市となるべく検討すること

②大学が発信源となりながら、多くの市民と協働し、かつ産官との様々な連携の形が実現した場となること

③隣接する東小学校や周辺の小学校にとどまらず、浜松市内の小学校、中学校、高等学校との連携を図り、「芸術文化夢舞台」が学校教育の場としても貢献できること

7. まとめ—2009年度研究会の方向性

2007年度から2008年度において行われてきた本研究プロジェクトは2009年度も継続される。2009年度においてはこれまでの研究成果を踏まえ、本学の開学10周年事業との連携も課題となるであろう。そのためこれまでのプランをハード、ソフト両面において一層具体化する作業を進めると共に、本研究から発信されるプロジェクト計画をどのような形で広く内外に発信していくか、についての検討も重要である。